



Eldons KoumuKAI
2-12-2 Anahimagi, Abeno, Osaka.

23, Mar, '83. No. 262

イコム通信

大阪市阿倍野区九軒2-12-2 向井 孝

▼ 3月29日、札幌地裁で大森勝久さんの判決公判がある。お金と時間と、ちよつと大へんだが、思いきつて、ぶつ子でんごーしよに、傍聴にゆくこととした。帰路は道草して出来れば未知の友人たちやゲルプと出会えたらうれしいなと思つてる。めうたに出まひい長旅だから。

▼ 旅中へ連絡は、札幌市北區北8条西5-18条ビル、ひらひら、気付(3月30日朝5) 十一時すこしまえ。石段下の遠くから、人声と、たくさんの足音がする。窓から首をつき出すと、先頭の数人を取り囲むように、ひとかたまりになった一団が、一せいに昇ってくる。Bさんの大声が、もう、玄関廊下あたりで聞えて—

「遺留証拠物」報告書



大森勝久さんの裁判

▼ この日の一月七日付読売新聞(北海道版)は六段めを見出しのトップ記事で、きわめて異例とも驚きともいえる予測を報道した。それは……
「道庁爆破」の早半ばに結審し「無罪か大森」の「決め手欠く物証」は札幌地裁、早ければ3月判決、ナント「無罪か大森」なんて、将来に遡する。しかも裁判結果に際して、記事のなかの一部分ならともかく、横ばきの大見出しがでるなんて事態は、まっほと検察の立証がめつめつで、権力側のよい合はつたりの報道が当り前のブイヤネンすらが、裁判経過の中で、事件のデッサン上げを見ぬかにはあれなかつたといつていい。

▼ 大森さんには、76年8月、爆発物製造所持密蔵という名目で逮捕された。これが別件逮捕つまり逮捕するための口実だったことは、その後不控訴とあつていふことでもしれる。そして権力が狙いをつけた本命の事件、北海道警本部爆破事件(76年7月発生)の「これも又不控訴」、北海道庁爆破事件(76年3月発生)の容疑者として再逮捕され、以来7年近い年月を拘置されてきた。その間、検察側の、まず逮捕、検問によつてつくろつた自白のデッサンには、大森さんの壮絶ともいふべき精神と肉体のカー完全隠蔽によつて坐折したに決り手となる物証が何ひとつないという「やつたない俺を目撃させるか」と大森さんには三丁書房から出した本の題名として、いびくも喝破していき、裁判経過のついでに、いよいよ3月29日判決をむかへることになつたのである。

▼ 読売新聞の記者はこうかいてる。「大森被告は、独自の「反自白」思想という立場から、これまでの公判廷で「当時爆弾製造の準備をしていた」と都市ゲリラによる「爆弾志向」を公言している。しかし、こうした特異な思想と裁判は全く別問題で、①大森犯行を裏付ける証拠がなく、「疑わしきは被告人の利益に」という刑事裁判の鉄則を適用 ②マリバイ成立の可能性すら強まつている」などから、同地裁が無罪判決を言い渡す公算も強く、検察側の状況証拠。について、どう判断を下すか注目される。」

▼ 判決は勿論、無罪以外にありえない。この七年間の裁判で、デッサン上げがほろほろにつぎつぎとされ、裁判を放棄せざるをえないような立場に追いこまれた検察の論者求刑が、なお平安として「死刑」にまつたことを思ふ時、判決も同じ穴のムジナであることは充分なぞられる。記者すらも無罪、安心は決してしておられない。しかも、そのことが「無罪」でなければ、死刑というそれは天と地のひらきにもまざる無限大のへびたりへと、大森さんを簡単に左右する。空おそろしい意味をもつものだと思ふは、なおさら監視してはふられぬ。



意味をもつものだと思ふは、なおさら監視してはふられぬ。(18日)

向井 孝

前夜からウリ事務所に泊ったAさんらが、朝五時の一番電車で、堺刑務所へ出かけていった。ぼくは、連絡電話待ちの留守番役。いつまでも薄暗くて、夜が明けないなア、と思つたら、雨がひっそりと降り出している。十月一日、山田契二さんの満期出獄の日。 × × × 十一時すこしまえ。石段下の遠くから、人声と、たくさんの足音がする。窓から首をつき出すと、先頭の数人を取り囲むように、ひとかたまりになった一団が、一せいに昇ってくる。Bさんの大声が、もう、玄関廊下あたりで聞えて— × × × それから、ずうっと五〜六時間。向いのアパートの軒の下。大きな二本のクスノ木の幹の裏側。石段下の路地の角。写真学校裏側が出っぱった空地に、一人、二人、三人……あわせて、なんと二十一人も。 終日、ふりつづける雨の中。 足ぶみしてたり、ささやいてたり、 傘をさして、ずうっと男たちが立っていた。 × × × 午後五時まえ。 今夜の青森ユキ夜行にのるとかで、 山田契二さんが、玄関から顔をだすと、 とたんにまわりも動きだして、大さわぎ。 五メートルほどはなれて、ざわざわつていく。 そしてフロ屋の曲り角のところまで 忽然と消えて、それっきり。 —まるで、さっきまでがユメみたい。 × × × ふりかえると、もう夕暮。 石段の横あたり、雨にぬれながら、 まう子さんが何かを拾いあげては、 クズ袋にほうり込んでる。 「お客さんの忘れもんや、おいちゃん」 みれば、あの男たちが捨てていった、缶ビールと ジューズの、ピカピカの空き缶が、 うわあーとばかり、十五〜十六個、足許にちらば っ。 いつまでも、ユメとウツツの境界で暮れのこつて いるような—

そこだけの、雑草の中。

